樋口麗陽著

月桂集

新體詩

雲嚮雨征須無四金五長厳赤快
の野の　磨　季箭恨月雨頭
賦吟聲衣浦歌題歌箭歌句惑浦樂

燼初月勇別山落山別勇月初燼
霜五　士　茶魂茶　士　五霜
句墓の　れ花怨花れ　の墓句
　　と　　と
　　野の花　百合百合黒白篠雑晩
　　低徊吟　山域趾合秋句籬山暁
　　　　　　　　　　　　夜笹川の懐ひ

青春忽
庭の葡萄よ
森の聖座
月の宮居
赤拂へ國民星
凱旋和集々
平　もがき
　　落花片
　　り

文學同志會藏版

III

自序

自序と云ふ、敢て在來の世迷語を列ぬるの謂に非ず、唯「月桂集」の一篇を飜かむとする青春の子に聊か云はんと欲す、

「月桂集」之れ余が日常微事に觸れ大事に觸れ作したるの文字、敢て詩集と云はざるべし、何者余は此の一卷を公表するの故を以て自ら詩人呼はりをなす程自惚と儆氣を

有せざればなり。

青春の兒よ余が前記の數語を胸底に秘め斯巻を飜かば、失望と落膽はさのみ大ならざるべしと信ず、

之れ余が自序也。

於米陵　著者識

月桂集目次

曉雲の賦……一
曠野吟……四
雨の聲……七
征衣……一〇
須磨の浦……一三
無題……一四
四季の賦……一五
金箭銀箭……一八
長恨歌(美文)……二一
五月雨三句(俳句)……二四
巖頭の感……二五
赤石の浦……四一
快樂……四二
戀……四四
初霜……四六
月五句(俳句)……四七
勇士の墓……四八
別れ……五一
山茶花……五四
落魄怨……五六
黒百合と野の花……六一
白百合……六五
篠山城趾低徊吟……七〇
雜四句(俳句)……七六

月桂集

鷺陽作

晩秋……七七
林夜笹川の懐ひ……七九
青春怨……八二
庭の葡萄よ……八九
霧の聖摩……九四
月の宮居……一〇〇
赤星……一〇八
拂へ國民……一一二
凱旋……一一五
平和……一一六
附もがき集
落花片々……一一八

跋……一二九

月桂集目次終

月桂集

曉雲の賦

樋口麗陽著

あら嵩高しや東の
高嶺にそゝる曉方の
黄金、紫、雲の彩。

荒野千里を眺下して
草と白露に囁くは
暁方彩雲の女の神か。

あしたの白露土に落ち
ゆふべ芝生の曲となる
自然の變化は美の極致。

芝生にひそむ蟲族
擧げよ汝等が其鬚を

歌へ、自然の歌をしも。

草木もゆるげ蟲も鳴け
暁方黄金、紫の
神の御臺の雪の下。

天地も搖げ雲も湧け
眞紅にそみたる東の
暁方雲の嵩高しや。

曠野吟

黎明天の一角に
無絃の琴は起りたり、
黎明曠野叢に
無限の愛は光りたり、
黎明小路の小蟲に
希望の聖示詩はあり、

黎明天の爛光を
萬人何ぞ仰がざる、
曠野に光る永久の
愛を詩人は詩はざる、

失意の遊士立ちて聞け
曠野にすだく蟲の詩、
希望と失意を東天の

無弦の琴に韻かすを、
森羅萬象夫れこゝに
無言の訓示へ布かれたり。

雨の聲

雷鳴りぬ、風起ちぬ
夫は革命の風のごと、
宛然惡魔の息のごと
天にむら雲むらだちて
下界に早き雲の脚、
雨よ下界の塵の世に

綺羅をまとへる貴人の
溺るゝ迄にふり濂げ
驕れる都苍悉く
崩るゝ迄にふり濂げ。

はるれば西の空清く
虹の七色色だちて
神のみ橋に似たるかな。
虹よ下界の罪悪の世に

永劫に架かゝれよ常久に
詩人不浄の世を怒り
筆持つ指も震へるに。

見る間七色色褪せて
消ゆれば十里草の上に
燦爛綺羅に映ふは
光永劫なる陽の御子か。

征衣

こゝ空高き滿洲の
水痩せ野枯れ山枯れて
見渡す涯は幾百里。

嶺山颪す寒風の
響きは凄し枯幹林
荘草無意に靡くのみ

嗚呼征士十萬波濤を越へ
無道の醜と戟執れば
早や高原の秋更けぬ。

陣雲高く蹶立れば
黒龍江の水青く
白旗飜めく岸崖の上。

砲の響きも打絶へて
薄き紫紺の蒼穹に

赤く煌めく星一つ。

草叢の蔭軀痩せて
鳴く小蟲の餘韻ながう
征衣の袖も濡うかな。

斷雲かゝる弦月は
彼方此方の天幕の
果敢なき夢を呪ふごと。

須磨の浦

空うらゝかに風そよぐ
須磨の浦曲をさすらへ
松はみどりに波白く
小波がくれに船行きて
節面白き海士歌の
聲ものどかに聞ゆなり。

無題

茫茫三尺そが中に
唧々蟲聲いと高し、

峯の梢に有明の
月をのこして別れ行く
雲もつれなき眺めかな。

四季の賦

驅りは早し光陰の影
長堤十里春風吹きて
世は爛熳の花の色
其香よ、花よ、其風よ」

南枝小晴き綠蔭の
葉末々々の白露に
幾千萬の月を見る

韻き涼しき夏の音」
千絲萬縷の情や湧く
空美くしき秋のかげ
月雲間を驅けるさま
勇將の軍を率ゆごと」
古枯はたと身に沁めば
寒月凄く輝きて
荒野十里の草白し
嗚呼雄大の眺めかな」

淡月花に泣くところ
綠蔭風の吹くところ
愁韻草に震ふとこ
寒月枯林に落つるとこ
何れか詩のなからめや。

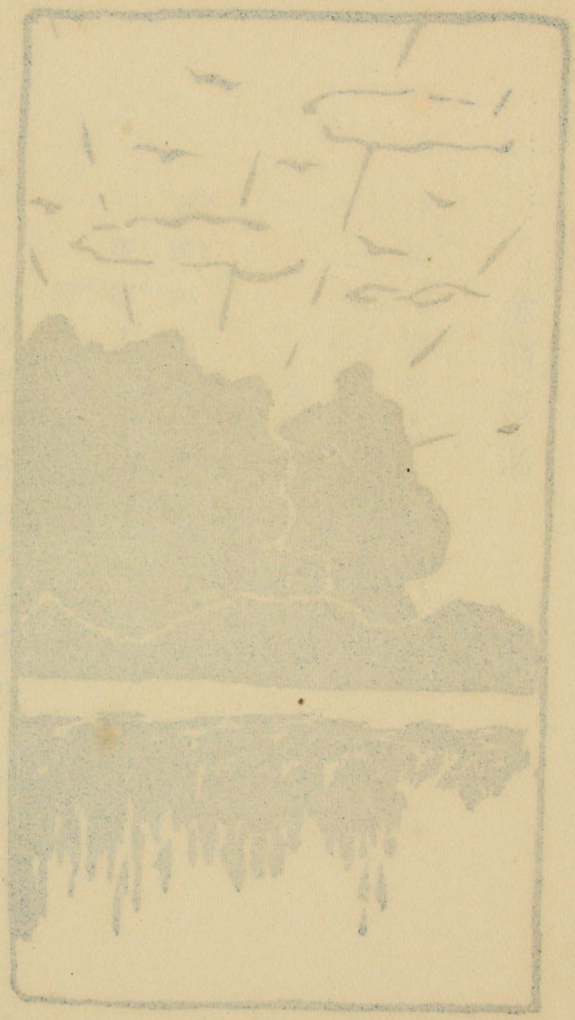
春には戀の想あり
夏は樂しき希望あり
秋は悲愴の調べあり
冬は咀呪の姿あり。

金箭銀箭

げにや空なる
東（ひんがし）のかなた
金箭銀箭
幾億萬條。
御神（みかみ）が此世の子等に
覺醒（さめ）よとて放（はな）ちしみ光（ひかり）
實（げ）に煌（きら）めきや聖（とうと）き
み光の征矢（そや）の音（おと）靜（しづ）か。

之はいともうるはしからずや

夏の野の遠き近き
幽かなる響きに怖れ
子等は皆夢路破るよ。
起てよとて光鉦なぐれば
子等は起つよ戈劒とりて
辛き苦しき生計の守と
戰闘の原に入るべく。
東の空の高き韻きは
そは何ぞ神がしばしの



罪多き子等が小胸の
紘なき琴の調見むとて。
あな聖からずや
東荒野に露と散り玉と亂るる
征めの光の幾億萬條
女神がかざす冠の玉の煌めき。
あゝそれに似たらずや
征め来たる高きみ光
起てよ子等夢路はなれて
戰闘の原に出でよや。

長恨歌

十年の螢雪、業未だ成らず、慨軻落魄、瓢然として懐かしき故郷の
錦糖を賄めば、嗚呼何たる變遷ぞや、垂穂摺々たりし田園は煤煙朦
々たる人家となり、露店師、日庸取人足等下層社會の巣窟たりし處、
今は早や茫草一圓の荒塘となる、流るゝ水と人の身の行末、浮世の
常條は駘蕩春の海の潮にも似たりしと我が故郷にも襲ひ來りしか、さ
ても思ひ出多き我が舊家は此處なりしと足許覺束なく、草踏みしだ
き來たり見れば、哀れや屋根落ち柱朽ち、瓦片堆然、井筒の邊りは
名もなき草の花繁く、蟲聲の幽韻、宛然九泉の彼方より髑髏の叫喚か

とばかり、

青雲に志を得ずむば閭里に困扼し寒に衣無く饑に物なくとも、何ぞ我が意となすに足らむや、とは壯心勃々たりし彼が浮世の嘲罵と迫害とに挑戰するの前提たりし也、然るに天彼に桂の美花を授くるの譽と榮とを持たしめざりし哀れさ、十年の苦闘勇奮得るところ唯失意と落膽而耳、而して尙此不運兒落魄の痩軀を以て變遷多き故郷の土を踏み、我が舊家の慘然たる有樣に接す、亦捲雲攫雷の青春兒、紅涙の滂沱たらざらんと欲するも得べけんや。

回舊の情緒纏綿、袖涙滾々として九腸轉々すれば、草葉の白露、風なきに音なく散りて神氣慄然として襲ふ、思はず一長大息を漏して

蒼穹を仰げば、二十日餘りの銀月、半面を淡雲に蔽はれ、叢間の蟲聲轉々長恨歌を詠ず、嗚呼十年の辛酸、夫れ廢屋の軒下、小蟲が詠ずる長恨歌を聽かむ爲めなりしか、非ず、落魄の不運兒、光明尙汝が胸間の一部を操縱しつゝありや、否や。

五月雨三句

五月雨や蛇の目番傘路濘み
五月雨に蓼咲く小川濁りけり
五月雨、村の土橋を流しけり

巖頭の感

炎々たる功名の焔に煽られ、一大黒潮の闇流せる都の地にと青春の志を齎しぬ、爾來彼は慘酷なる運命の巨掌に繙弄せられ、青春奔放の志氣遂に衰悄し、形容枯槁、纔かに疲神痩軀敗殘の身をもつて懐かしき故郷の山川に再會し、思ひ出多き南山巖頭に佇立し、落ち行く夕陽の殘光を眺めて、已が現在の運命を追懐し、西空遙か搖々として流れ行く紫雲の影を逐ひて、無限無涯の感慨を馳せ、紅涙滂沱、巖頭の青苔を霑したる一青の詩へる。

散るべき花の花衣

止めむ術もあらざれば
散り行くまゝに春晩れぬ。

散るべき人の運命なれば
止めむ術もあらざれば
散り行くまゝに散り果てぬ。

乙女が戀のたのしみも
憂き、悲しみも病ひも
覺めては同じ冷やゝけき

胞き運命と人や知る。

羅綾の衣花の山
萬朶の霞落陽の
美しきも水に浮ぶかな。

希望の驅り早かりき。

朝は清き香に狂ひ
磯に寄るさの波を戀ひ

笑みて嘔ひぬ月の花。

狂へる駒は早かりき。

夕奇峯の嶺に攀ぢ
心、緒遠く西巒の
洒瀟の雲に驅け入りて
一夜の袂別惜しみては
日子のみ裾に額づきて
あつき涙の跟とめぬ

嗚呼壯なりき、嚴なりき。

勇みの翼強かりき。

森よ林よ大曠野
光まばゆき曙の
雲にも心うれしくて
心は飛びぬ空高く。

思へば秋の夕間暮

木の葉は風に散り交いて
鳥も塒に皈るころ。

逸る心の翼のして
雲間に匂ふ桂樹の
其花の香の馨り香を
折りて眺めて棒げむと
荒き浮世の雨嵐
幾十の春の晩れ行くに
破袖幾度絞りけん。

衣の袖は濡るとも
希望の花を仰ぎては
心も身をもかゞやきぬ
利刃の如き嵐さへ
蟲の鳴く音と聞きにけん。

自然は茲に廻り來て
花は霞みぬ蝶舞ひぬ
鳥は歌いぬ聲高く

野にも山にも林にも。

夏のさゝ川水清く
奇峰の嶺はいや高し
春夏秋やはた冬の
み空の星は煌きぬ。

森よ林よ大曠野
村よ都巷よはた海よ
曙の光はひんがしの

雲の色々彩どりぬ。

花には紅き情あり
蝶に亂舞の興はあり
鳥にも戀の歌あるを
今はた我に詩ありや。

舞はゞ廣かる大蒼穹
登らば高し奇峯の嶺
今はた我に翼ありや

高きに攀(よ)づる術(すべ)ありや。

流れも清き筑水や
波に映らふ夕榮の
眺め水面(みのも)を流れつつ
彼方に高し雲の峯。

今我立てり南山の
頭角高き巖の上
下に碎くるさゞれ波

松に自然の琴をきゝ
袖に悲愴の風そよぐ。

希望の翼凋落(しぼ)てては
松に奏づる天籟も
悲哀悽慘の曲韻く
高き巖下に碎けつゝ
永劫に響かむ囁きも
尚落魂の憾みあり。

ゆふべ〳〵に空低く
朝な〳〵に空高く
足なみ緩く又早く
紫雲よ、其一雲よ。

蒼穹は高しいや高し
蒼穹は廣しいや廣し
紫雲よ、其雲よ
汝が行く涯は何處ぞや
天樂落つる花園か。

蒼穹は高しいや高し
蒼穹は廣しいや廣し
紫雲よ、其雲よ
汝が行く涯は何處ぞや
明星光る露の野か。

蒼穹は高しいや高し
蒼穹は廣しいや廣し
紫雲よ、其雲よ

汝が行く涯は何處ぞや
岑上の紅葉色燃へて
孤雁連雁鳴く峯か。

嗚呼我が希望凋落の
疵持つ身の行く果は
光明消えし常闇か。

傷みに叫ぶ朝夕の
愁は天籟松籟や

杜鵑殘月、鶴涙の
泪の緒のそれ而耳か
明星光る大曠野
高く雲行く其朝
雲驅け行く其夕。

岑上の雲に散る花も
巖下に唸る水聲も
魄啾々の韻あり。

譬へば弱き己が身は
光うすれし殘陽の
野末の露に映る如
蟲の聲にも露散らば
再び浮ぶ運命(さだめ)かは。

赤石の浦

風和らけく波白き
赤石の浦にイめば
盡きぬ思に長き夜を
思ひあかしの浦の月
見るから袖にかゝる波。

快樂

富貴は春の夜の夢
快樂は秋の夕の露
醒めて枕邊痕もなく
散りて果敢なや人の命。

嗚呼うつし世の塵の子の
富も榮達も何かせん
汚れし快樂何の價値。

されど汚濁の人の子は
露より脆き身を恃み
富貴榮華の幹に倚り
怪訝の快樂追求つゝ
酒地肉林に夢結ぶ
嗚呼覺醒ざるや現世人。

戀

百夜の契り深草の
積る吹雪に埋る身は
誰をか怨む仇烏
月にも闇も憧かれて
懊惱へあかすも戀なれば
嵯峨野の奥や那智の瀧
人は知らじな深山路の
血になく思ひの杜鵑。

げに曲者は戀の神
夫れとも己れ不知火の
有明海に鳴く千鳥
哀(あはれ)其聲戀の運命(さだめ)か。

初霜

野山の草の色褪せて
紅葉散り布く昨日今日
枯野に立てる白菊が
秋の袂別を悲しみて
袖の涙の村時雨
落ちて霜とや變りけむ
今朝をきまさる初霜の
暾光出でず風寒し。

月五句

山路行く旅人の笠や三日月
足重く奈良の旅路や秋の月
酒に醉ひ二十日の月を見ざりけり
奈良の宿三日振りなり月の影
ほろ醉ひて月を寢て見る心地かな

勇士の墓

益良丈夫が國のため
恨みの醜を拂ふべく
犠牲としなりし面影や
茲滿洲の無名丘。

勇士が墓の盛土も
半ば崩れぬ降る雨に
標朽ちたり吹く風に

四邊哀れや草しげり
蟲の調べも悄々と
高原遠し暮の色。

嗚呼十萬の精兵を
空しく醜の犠牲とせし
高原こゝに幾月日
今尚魂は閧を擧ぐ。

感極まりて見上れば

勇士の靈か天上の
紫紺破りて幾萬は
怨むが如き星の色。

別れ

黄菊白菊地に委して
時晩秋の夕間暮
夕日の名殘肌寒く
空にたゆとう雲の色。

友と袂別(わかれ)のつらきとき
幾重美はし雲の影
行けよ我が友外(と)の國に

風運の鴛せる我が友よ
さらば別れんいざさらば
四度黄菊の咲かむとき
再び君が麗はしき
洒瀟の面にまみへなん。

行け好運兒外つ國に
君が門出の壽きに
空なる雲も勾へるに

行けよ我が友勇ましく。

山茶花

三坪に足らぬ細庭の
片隅に咲きぬ美はしく
思出多き山茶花の。

去年さすらいの其折に
汝しを野より此庭に
移し植へたる主やたぞ。

白玉樓中露と散り
靈魂のゆくへや幾萬里
嵐と共に消へにしを。

汝は何時の世に朽ちん
心もそれやけなげなる
吹雪と共に幸あれよ。

落魄怨

淡月椽に夢と落ちて
破窓の煤紙淡又淡
春宵は深し天地寂たり。

嗚呼南窓に想抱きて
殘月古城のかげに沈むを
滴涙の情緒昔なりき。

爾來逆境の激浪に立ちて
戰闘々々又戰闘
報酬は何ぞ慰藉は何ぞ。

朝に妻は病枕に呻吟
夕餓に泣く愛子の叫喚
嗚呼夫れ十年の辛酸之れ報酬か。

朝燦たる曙光を仰ぎ
夕洒瀟の夕日逐へば

自然の光景何ぞ美なるや

由來人の子怨多く
昨日は都巷に其知を誇り
今日は結繩の姿となるよ。

我れ境界の醜と闘ひ
十有餘年は徒となりぬ
凱歌聳肩何處にありや。

思へば十有餘年の往昔
未だ乳臭兒の伽はあるも
天馬走穹の理想ありき。

舞龍に理想を現世に得むと
赤手空拳浮世と闘ふ
神は乳兒が腕折りぬ。

天を怨み地下を咀呪も
慰藉の麗果何處にかある

無情乎、有情乎、慘乎、酷乎。

嗟々運命の神をぞ怨む
眞理の戟執る可憐の志兒を
醜に犠牲としなすといふ乎。

黒百合と野の花

人は呼ぶなり黒百合と
神は呼ぶなり野の花と
同じ白露に面觸れど
一つは神の園に萠え
一つは人の野に萠えぬ。

野花はみ神の辱なり
黒百合は人世の飾り花

かしことこゝに萠え出てゝ
野花は神のみ花なり
黒百合は罪なる人の花。

されば朝の白露も
野花の上に落ちむとき
神の情と思はれむ。

されば夕の蟋蟀も
樂しき聲を振り立てて

鳴かば自然の歌となる。

されば朝の白露も
首うなだれし黒百合の
其花葩に落ちむとき
露に汚れの影浮ぶ。

されば夕の蟋蟀も
悲しき聲を振り立てゝ
下葉の蔭に鳴かむとき

聲に罪なる韻(ひびき)あり。

白百合

老ひたる母を養ふに忙殺せられ、雄嚴崇高なる曙の光景を仰ぐ能はす、茅屋の簷下を出でし小童、日頃通ひ馴れたる谷間路にとかゝりぬ、路傍潺々として湧く清水、拳大の巖に激し泡沫飛散、美人の立姿のそれの如き白百合の花葩爲めに艶として打震ふ神々しきを眺めて小　の歌へる。

つらき浮世の生業(なりはひ)も
老ひたる母のましませば
我れは行くなり山深く

小鳥の聲を友として。

今日も行くべく朝まだき
曙の光りのさゝぬうち
清き白露の散らぬ間に
破れたる衣身に被ひ
辿るは細き溪の路。

朝な夕なに聲低く
詩のみ神が天樂の

それにも似たる呼きに
岩間流るゝ眞清水を
聞きつ眺めつ我は行く。

閑幽紫水の深山路に
皷膜にひゞく其聲は
神の呼聲か人の子か
半ば惑ひつ見反れば
うれしや美しき白百合は
何時の頃にか咲きにけむ

昨日見ざりし白百合は
大氣に匂ひ香をのせて
清き泉の岸に倚り
覺束なくもふるえりき。

白百合汝れよ白百合よ
何の美想に笑めるかや
微かに震ふ其姿。

百合よ落ちなそ水の面

震ふ姿のやさしくて。

都巷彷徨ふ其風よ
人の香遠く隔たりて
自然の幸に打震ふ
かくもやさしき白百合に
罪なる歌ぞ傳へなそ。

篠山城趾徂徊吟

我れ一夕華かなる暮帷に包まれ篠山の城趾を徂徊し、中空峨然として聳立せる鐘ヶ淵紡績株式會社久留米支店工場の滊笛の音、又は轟々たる機關の響きを聞きて

暮れの光りを身に浴びつ
篠山城の趾訪へば
右に流るゝ千年川
左に聳ゆ鐘が紡。

暮帷破りて響き來る
滊笛の音に耳かせば
實に斷腸の感情湧く
嗚呼慘なりや大舘。

嗚呼壯なりや中空に
黒煙高く漲らし
窓漏る光そは何か
星かとまがふ電氣燈。

鳴呼宏なりや機關の
窓の硝子を震はせつ
多情多涙の我をつく。

鳴呼慘なりや中空に
聳ゆる高き建築の
中に働らく乙女等が
衰れの姿をもほへば。
情に薄き上長が

鋭き鞭を振翳し
か弱き女子が頭上に
下すを見なば鳴呼それよ。

やよ死せ女子よ汝れが運
辛きは現世のさまなれど
身に傷うけむ責鞭の
振ひの聲に恐るゝな。

乙女一日の生業や

老ひたる母や妹の
嘻々と喜ぶ顔見むは
如何に乙女の幸なるよ
思へば長が窘虐や

其身生計のなからずば
自由と權利平等の
同じ政治の人の子よ
やよ女子忍べ目を瞑れ
如何に長等が哮ゆるとも

樹梢の風のさすらいか。

譬かば譬け永劫に
か弱き女子が肉傷り
甘き血汐を酒となせ
長よ汝等は眞人ならねば。

雑四句

雨後の月見ずに寝たのを後て悔ひ

目の見ゑぬ母の手ひいて花見かな

下女下男暇貰ふての花見かな

峠三里越へて懇へば清水かな

晩秋

暮れなんとす
　金風の秋
かりがね哀れに
　枯野の月夜
何の叫喚ぞ
　卒塔婆の邊
風は幽瞑に韻き
　茫草の戰慄

木の葉落り痩肩を叩く
俯し見れば流水潺緩
嗚呼痩せたりな
五尺の此の身
三年の放浪
徒らに枯槁す
嗚呼悲なりや
晩秋の風
嗚呼惨なりや
萬愁の秋。

秋夜笹川の懐ひ

澄み渡る秋の夜半に
それとなくいさゝ川邊に
つくねんと一人佇む。

團々たる三五の月は
中天の雲を蹴破る
あゝ清なりや此夜の月。

鳴呼此の月よ、此のいさゝ川よ
清き清きこの月影は
今も尚昔日（むかし）かはらじ。

さゞめ行くいさゝ小川も
今も尚昔をさゞやく
鳴呼思ひの種は盡きじな
此の月夜、此のいさゝ小川。

唯二人胸の血を掬み

手をとらば玉の腕の
鳴呼それよ戀のまことよ。

月の君知りておはさば
永劫に語れよ戀の運命を
あたゝかりし昔をもはゆ。

川の君きゝておはさば
永劫に呼け昔戀路の
消へて行く脆き運命を。

春怨兒

青春の血は前途一閃の光明に湧き立ち、凛々たる壯志を抱き、怒濤逆捲く浮世の潮流と闘ひしも、運命の神は常に彼を愚弄し、嘲嘲し、光陰徒らに長けて壯志未だ成らず、轗軻落魄、紅血尚壯かゝりし往年を落花地に委し、天地轉た悄然たる晩春、追懐の情措く能はざる薄運の人と語りて。

君見ずや
花の白雲、
露に映らふ

のかげ、
タイムの影
老ひて去りて、
有情の落花
水に流れ、
一瞥止めず
花の面影、
そは去りて
そは行きて、
哀れ暮れ行く

春の夕の
朧なる星にも似たりや。

沈淪不遇の
運命に泣ける、
嗚呼汝れ
可憐の春兒。

花の下蔭
露の小路に、

結びたりな
無限の春夢、
さるを痕蹟(とゞめ)常久(とこしえ)に消へて

怨みは深し、
西巒に馳する
千絲萬縷の情。

流水湲漫
落花と親しみ、
晩春の面影

鳴呼慘の極みならずや。

泣くは人の子
三尺の茅屋、
咀呪か叫ぶか
泣くか唄ふか、
窓下の蟲聲
何ぞ悲なるや。

鳴呼可憐兒

希望に燃ゑし、
金星銀星
いくつ見しや、
青春徒らに長けて
流水を訪へば、
紅涙滴々
破袖を絞るにっ

鳴呼自然よ、
鳴呼人生よ、

運命はそれ
時の經過よ、
泣くをやめよ
叫ぶをやめよ、
自然はこゝに
春を措きて
綠葉濃き
をさな夏の
やさしき色彩に
汝れを迎へむ。

庭の葡萄よ

乳房はなれて十と二春の
乙女子は三年振りにて
乳母が賤家を訪いぬ
其飯るさ
野にありし尺餘の葡萄一本
三里の峠を越えて
我が庭の片隅に植へしが
光陰の矢の音の韻きに

二つの春は過ぎぬ
葡萄は高き棚に匂ふ頃
其主や現世を辭して
高き天上の星とはなりぬ
一年は夢と過ぎぬ
葡萄の幹いたく太りぬ
其實は圓く甘く
紫房長く垂れたり
されどそを手に觸れむ主や誰なる。

紫の房と垂れし葡萄よ
汝れとても怨みや多からめ
野の末の土に生ひなば
其實小鳥の餌食とならむを
罪なりや人の子庭に植へて
其實は甘く幹太く肥ゆれど
少さき主現世を去りて
衆人は一と目かさじと
されどそは汝れが仇なれ
徒らに野末の露に生くとも

そは果敢なき草の脆き運命よ
今日生ひて夕に枯れなむ
嗚呼夫れや短かき運命ならずや。
汝よ、主は果敢なき汝を憐み
遙々と三里の難峠越へて
幸多き我が庭に植へたり
夫を怨み煩悶へ泣かむは
なか〳〵に罪や深かかれ。
怨みなそ甘き葡萄よ

紫の房の其實は
汝が怠りて眠る頃ほい
星となりし少さき主は
天上の榮なる雲に乘りて
夜な〳〵に降りて來りて
其の甘き汁を吸へるよ
其を知らぬ汝れや泣かざれ
怨みなそ庭の葡萄よ。

森の聖座

（一）

鳴呼己が身は聖なるか
闇の垂帷をかいあげて
森の聖座に近くやや。

鳴呼脱塵の己が身か
闇にも白き森泉
草の汀に佇立むとき。

鳴呼己が身は浄なるか
森の秘密を齎らして
人の世界に流れ入る
清き泉に手を入れて
み球の神秘きくときや。

（二）

あらず此の身は聖ならず
慄く足や震ふ手に
闇ぬひ帷さしあげて

聖座の前に跼せしとき
聖なる神は訓戒ぬ
『嗚呼人の子の罪なりや
垂れし汝が頭腦には
汚れし血汐漲ぎるを
飯れ聖なる神の子に
されば垂れたるそも汝が
夫れや腦漿打ち砕け』
ああ我如何で聖なるや。

夫れや此身は塵の子か
森の泉に背をのべて
崇高き聖示聞かむとき
來るや何處か神籟の
我が罪の袖搖がせば
四肢と五管は戰きぬ
あゝ我れ遂に罪の子か。

嗚呼我れ遂に淨ならず
泉の眞水手に掬び

冷へし唇頭に觸れむとき
さやかに水は呼きぬ
『ああ聖ならぬ人の子よ
汝が冷へたる唇頭は
罪と汚れに溢ち滿てる
塵世の水を掬びたり
見ずやをののく其腕
知るや冷へたる唇頭は
聖なる神を欺くや
去れよ罪の子疾く去れよ

暫し人世の沼を出で
罪と汚れを洗ひ去り
再び來れ神泉に
さらば汝が紫の
冷へし唇頭に觸れもせむ
聖なる血汐通はせむ』
嗚呼我れ遂に淨ならず。

月の宮居

行て見ずや
都巷に住まふ罪の子等よ
彼方々々曠野の原や
土を宿りの虫の族が
そは脆き露の運命を
いと悲哀に満てる
聲張りあげて
靜蕭なる

壯嚴なる
空行く雲に韻かす。

佇みて
仰ぎ見ずや
無限の蒼穹
あゝ聖なりや休らひの垂帷(とばり)
靜かに人世を抱けば
幾億の罪の子の頭うなだれ
夫れよ其處に夜の國の律法(おきて)布かれぬ

宏大ならずや東の空
雲の色々
いと静かに静かに
月姫はみ足はこぶよ。

似たりや下界は
怨み多くうらぶれの子が
崇高なる希望の深淵に立ちて
遙か神居の御窓漏れ來る光仰ぎたるがこと。

大なる力と光をもてる
銀箭は彼方こなた
上よ下よ右よ左よ
萬物に射はなたれぬ。

聖ならずや銀光
艶ならずや月姫の
舞衣の裳のさばき。

幾億の星の郡族
舞衣の香にそゞろ醉ひて
彼方に飛び
此方に舞ひ
翼かろく裳輕く
燦爛として光鋌下界を射るよ。

月姫の御脚は早く
月の宮居の
白き花霏々と散り交ふ

銀門の扉は靜かに開きぬ。
衣ずれの音低う
月姫はみ座に就きぬ
幾億の星の郡族
御座の彼方にひれ伏しぬ。

艶麗ならずや
壯嚴ならずや
月姫は郡族の

夜の任務をねぎらひ給ひぬ。

夫れや人の子
眠りの夜衣脱きて
門の戸に倚りても仰げや
壮厳雄麗なる星の高殿
華やかなる月の聖姿を
かくて夜の國の光明はあるよ
されど幾何のタイム過ぎて
やがて夜の國の律法は消えなむ

勞働の幕開らかるべく。

赤星

見よや蒼穹なる赤星を
夫はうらぶれの己が身が
浮世の枷に苦しむも
寝夢に忘れぬ乙女子が
下界の長き病傷に
靈魄飛びて天上の
銀河の淵に佇みて
下界の枷に離れえぬ

我れの姿のうつらむを
厚き情に待ち詫びて
宵より宵に光るぞや。

夫れや赤星汝が光鋭
燦然としてうらぶれの
我が胸板を貫きて
苦しき現世の生業も
はげしき苦痛感えじよ。

星靈來たれ宵深く
四隣寂莫籟絶へて
人の子無意に眠る頃。

夫れや赤星來らずや
我れや痩せたる細腕
そを差のべて待てるなり。

嗚呼情ある赤星よ
汝れが來りて我が胸の

黒濁苦　の血を拂ひ
ゆるなさけの血汐を吹けよ。

來たれ赤星宵々に
四隣蕭たり寂として
人の子無意に眠る頃。

拂へ國民

暗雲朦々
東亞の天を鎖す
慘憺たる
妖雲の中に
暗をぬひ
ひらめくは何
十年
怨恨（うらみ）の劍（やいば）

一天に輝やく光
日の本の國の御威よ
彼れ鬼神
惡魔なりとも
拂はずば
此の日本國
如何にせむ
御神の御末
日出づる
國の民をや

振へやよ
　民振はずは
東亞の平和
　如何に保たむ。

凱旋

東亞の醜を戟にあげ
凱歌壯なり我が軍の
意氣健なりや神州兒
二年戀の母國を踏めば
譽と榮と歡樂や
國民歡に狂すかな。

平和

譽と榮と歡樂の
美しき光を戴きて
嘻々然たりや神州兒、

平和の色酒盃に入り
面上ぐれば蒼穹は
榮ある光下したり、

平和の聲地に滿てば
彩雲かけり水溢れ
天と地とは平和の
四顧の同胞抱きたり。

月桂集（終）

もがき集

落花片々

七日のあいだ止みなき五月雨をさても村子が天を怨ずる。

肺に病む身はまだ癒へず花散りて今年ばかりの春暮れにけり。

旅み僧すみれ咲く野を行き過ぎて長閑に灑ぐ春雨の音。

空晴れて田畑耕やすわかき男が破れしころもに春の風吹く。

三千の舟の帆のかげきへ失せて夕陽すぎ行く白波のあと。

三株四株賤が家の上に菜花咲て薔薇ちる庭に衣干しけり。

とがめざれな細き心の懊惱をばみつげの潮にむくろ沈めむ。

夕日（あかね）さす小川の汀うない子がはなかごさげて佇めるあり。

讀經もる山のいほりに月更けて細谷がはの水のせゝらぐ。

野の末のはなの葦に蝶蝶とびて地塘のやなぎ枝霞みけり。

すずめ鳴くこへかしましき桃の枝若女が裾に蝶のむつるゝ。

高殿に舞の音止みてしづかなる夜雨すかして衣ずれの音。

苔に伏す夫慕ひよる若き女がぬかつくはかに花散りかゝる。

音もうすき三絃に人のかどに立つ老ひたる瞽の姿いたまし。

琴をきて靜かに暮るゝ窓に倚る乙女こひしよ梅咲くの家。

岩高き溪の流れに百合咲けどつばさなき身よ嗚呼觸れ難き。

繻月はかすかになりて夜は更けぬ鷄啼き告る片山の里。

すみれ咲く野邊行く川のさしに生ふ柳の小枝朝霧こめぬ。

入相の鐘のひびきもかすかにて二ひら三ひら櫻花散る。

高殿に琴の音絶へてさゝら散る園のかたへに月更けにけり。

片山の里の夕暮雨ふりて梨のはなちり鶏のなく。

緋桃散る賤が伏屋に春たけて小鳥なくなり裏藪のかげ。

紅き雲、しろき、むらさき黄雲の西空こめて春光ながし。

東窓にひく〳〵たれたる紅き花さてもすずめのさへづりのよき。

そとよりて君が腕によりもせば餘りによはき我が胸の血よ、

三年經ちて戀しき故郷にかへり見れば白梅朽て草花しげき。

殘月や孤燈かすかに消へやらであはれ障子に人影うすき。

玉垂の神の宮居にけぶり立ちて樵夫のたどる細路峻し。

君泣かば我また泣かむこのゆふべ春いまくれて我詩ならず。

白梅のはな散る里の夕間暮馬子こゑかれて夕靄うすき。

はなの宴興はやうすれて夕暮の盃の小酒に花散りて來ぬ。

秋風の叫びは凄く木々に鳴りて庭前の梧桐はや散りそめぬ。

うすれ行く柳の枝にこまとめて晩れ行く春を美しと見し君。

船にして下る水面に夕ぞらの雲のいろ〳〵あな美くしき。

蒼穹に光星幾億かずあるも汚れの現世（いま）に聖星なきや。

青柳の絲に雨ふるまどの夕うつくしき君の琴かなでます。

白萩の匂ひこぼるゝ窓にして文讀む乙女面清きかな。

西ぞらの彩よき雲をうつすべく繪師佇めりさゝ川の橋。

春姫が舞の衣のかほりみちて菜の花ばたけ風ゆるく吹く。

二十にはまだ春若き人の子が春の潮に何ぜ煩悶ゆる。

ソロモンの榮華になにの智者戀は永久不滅を語るに。

いざさらば分れ行かむになれすみれ今日の一と日を永久に忘れな。

白椿なれがかほりを春の海のかなた鷗の國にしのばむ。

をばしまに月更け蓮の花白う黒がみたけの女子が煩悶よ。

森ふかう古刹の椽の若き僧くろきみ袖にさくら散り交ふ。

花み園若き血かよふ黒髪女そと折りませば白露こぼれぬ。

御題新年の川

新年の川の聖詩を高く誦せ歡樂みつる平和の子よ。

新年の川の水面に平和の歡樂みちて美しき色はゆ。

唫り

夕立や刈穂の稻を撫でゝ行く

鷺立つや蘆のしげみに釣の人

電や雨後の景色を一寸見せ

一昨日の雨でさぼてん二寸のび

箱庭の山に月入る夜更かな

自在鍵に蟋蟀のなく夜寒かな

蟋蟀のへつついになく夜寒かな

箱根山頂絶にして月高し

月高し紀州の山を越へてけり

行き暮れて刹萱しげる小路かな

追分の木標朽ちし木曾路かな

美濃路は春まだ寒し旅衣

春寒き美濃路一人旅しけり

下駄履いて箱根の山を通りけり

朝寒や六時に顔を井戸の水

木曾の旅翁と語る夜寒かな

朝瞰出でず蓮の花開く朝ぼらけ

秋長けて八百屋の店に茄子細き

堤を行く馬嘶くや霜の朝

駄菓子賣子峠の茶屋や桃の花

梅散りてまだ肌寒き旅路かな

梅の里焼餅店の旗赤し

赤旗の牛舎に高き夕日かな

閼伽挿に木の葉散りけり寺の暮

小鼠の戸棚をあるく夜寒かな

柳下蛇の目の傘や春の雨

柳多き都通りや春の雨

蚊遣りして一同庭に涼みけり

寒月や雪隠にして句を得たる

古寺の門に散りけり栗の花

晒さす春の小道や海老茶かな

夜長夢武藏野を一人通りけり

朝顔の垣に匐ひたる蝸牛かな

川の瀬にころせみ鳴くや寒の月

巡禮の笑に散りけり山櫻

秋の神系瓜の棚に呵いて

菜の花や繪日傘二つ見え隠れ

病み上り椽の蠅打つ日長かな

附録もがき集（終）

明治三十九年一月廿五日印刷
明治三十九年一月廿七日發行

著作權所有

發兌元　文學同志會
大阪市江戸堀上通一丁目一一九番邸（電話本局千〇九三番）
文學同志會大阪支部
廣島市西橫町
文學同志會中國支部

編輯兼發行代表者　大月隆
東京市牛込區市谷加賀町一ノ十二

印刷者　青木弘
東京市神田區錦町一丁目十番地

印刷所　株式會社秀英舍工場
東京市神田區錦町一丁目十番地

定價金二十五錢